



講師用テキスト

地域生活の視点で学ぶ重度身体障がい者の暮らし ——「地域で暮らす」を覗いてみよう——

実施主体：NPO法人 境を越えて



このカリキュラムと講師用テキストについて

●このカリキュラムについて

「NPO法人境を越えて」は、**重度身体障がい者とその家族がその人らしく地域で暮らせるための仕組みづくり**をミッションに、2019年に設立しました。

現在、3つの柱——①知ってもらう(介助の魅力と現実を発信)、②育てる(介助者が続けていける仕組みづくり)③繋がる(ネットワーク構築とその活用)——をもとに、8つのプロジェクトを実践しています。そのうちの一つが、このカリキュラム化プロジェクト(通称:カリプロ)です。

地域生活の基盤となる介護(重度訪問介護)の専門性を正しく理解することや、地域生活を支えるための介護と医療の連携、障がいの社会モデル、などを講義内容に盛り込むことで、**在宅医療・福祉の充実に貢献できる人材の土台形成**を講義の目的としています。

カリプロの大きな魅力の一つは、実践を重視した座学やグループワークだけではなく、**地域で暮らす障がい者宅で介助体験ができる**ことです。学生たちの多くは「障がい者」と呼ばれる人たちのことを「かわいそう」「助けが必要な人」という目線でみるところからスタートしますが、自分たちと変わらない日常を目の当たりにしたり、ごく普通の会話を交わしたり、車いすを押して街のバリアを感じたりするなかで、**障がい**が社会によってつくられていること、また**介助者や在宅医療の存在**によって障がいがなくせることを体感し、それを言語化していきます。

私たちは、このカリキュラムを通して、「障がいとは何か」を自分ごととして考え、**当事者たちの暮らしを支えるために必要な視点を得る**ことで、地域生活を担う専門職の仲間がひとりでも多く増えることを願っています。

●この本(講師用テキスト)について

①講義内容を作成した人たちが、「**大事にしていること(学生たちに伝えてほしいこと)**」「**ねらい(伝える理由)**」「**講義を進めるうえでのポイント**」を解説しています。「**グループワークを行うタイミング**」「**ワークシート記入のタイミング**」なども指定していますので、進行する際の参考にしてください。

※ワークシートなど、講義内で活用する資料は、巻末に掲載しています。併せてご覧ください。

②この本は、学生に配布しているテキスト本文の内容に沿うかたちで、解説しています。実際のテキストと照らし合わせながら読むことをお勧めします。

③講義の際に使用するパワーポイントや資料は、講師自ら作成してもOKです。参考までに、以前の講義で使用したパワーポイントのデータもお渡しします。流用したり、一部書き換えたり、という方法で活用していただいてもかまいません。

本授業の目的と目標

【目的】

地域医療・福祉の充実に貢献できる人材の姿勢を知る

地域で暮らすこと、それを支えることを自分ごととして考えることができる

【目標】

1. 地域で暮らしている当事者の生き方の多様性に触れる
2. 地域で暮らしている当事者の生活にかかわる職種やそのかかわり方を伝えられる
3. 多職種連携の中で、自分の専門性をどのように生かしたら良いか主体的に考えることができる
4. 地域生活に様々な社会制度が関連していることを知る
5. 生活を支えている介助者の役割や専門性について知る
6. 障がい者を社会モデルの視点で見られるようになる

講師用テキスト*目次

このカリキュラムと講師用テキストについて	2
本授業の目的と目標	3
第1部 地域で暮らすってどんなこと?	5
はじめに	6
1章 地域で生きる	7
2章 地域で支える	9
3章 地域で暮らす	13
第2部 介助者・医療者の視点とコミュニケーション	15
1章 医療者として持つべきスタンス	16
2章 医療者のように見る・考えるための「身体」に関する基礎知識	17
3章 医療者のように見る・考えるための「苦痛」に関する基礎知識	17
4章 医療者のように見る・考えるための「こころ」に関する基礎知識	18
5章 医療者のように見る・考えるためのアセスメントの視点	19
6章 介助の視点で覗いてみよう	20
【Pick up】介助の視点の考え方を練習しよう	22
7章 コミュニケーション支援について	24
【コラム】学生ヘルパーを経験して感じたコミュニケーションの重要性	26
第3部 「障がい」について考えよう	27
1章 障がいって何? 当たり前の見方を変えてみよう	28
【コラム】学生時代の介助経験を振り返る	29
講義で使用する資料	30

第1部

地域で暮らすってどんなこと？

- 地域で暮らす重度身体障がい者の日常をイメージできる
- 自分たちが目指す保健・医療・福祉の地域での立場をイメージできる
- 地域で暮らすとはどういうことか？ を自分事としてイメージできる

はじめに

テキスト作成者：本間里美

◎所要時間目安：10分

◎ねらい

これから始まるカリキュラムが「障がいとは何か？」を考えることをテーマの一つにしていることを理解してもらう

◎講義を進める上でのポイント

テキストをベースにしながら、現時点で思う「障がい」像を受講生に記録してもらう。

⇒★資料「【考えよう】障がいって何だろう」を使用!

本授業の目的と目標

所要時間目安：10分

◎ねらい

本プログラム受講生が目指す目的と目標を意識してもらう。

◎講義を進めるうえでのポイント

本カリキュラムの6つの目標が、テキストの第1部～3部のうちどこに対応しているのか、テキストの目次を確認しながら伝えていく。

第1部……目標1・2に該当

第2部……目標3・5に該当

第3部……目標4・6に該当

1章 地域で生きる

テキスト作成者：岡部宏生

◎所要時間40分～1時間

1節 「地域で生きる」を決めたとき

◎ねらい

受講生にとって、このあとに続く講義を「自分ごととして」捉えていくための導入とする。
「自分が重度身体障がい者であったらどう考えるか？」と受講生が考えることができる。

◎資料作成で大事にしてほしいこと

重度身体障がい者が地域で生きていこうと思ったときの、率直な気持ちを表現する。
例) 地域で暮らそう、暮らしたいと思った理由、地域で暮らしていきたいと思ったときに最初に感じた課題 等。
※ここでの「地域で暮らす」とは、当事者が障がいを持ったことをきっかけに病院や施設等これまでの生活スタイルではない場所での生き方を選択することではなく、これまでと同様の場所で暮らしていくことを表現している。

2節 地域で暮らす当事者のある一日を覗いてみよう

◎ねらい

重度身体障がい者が地域で暮らすイメージがまったくもてない、もしくは、重度身体障がい者はベッド上で介護されるだけの存在、主体性が無い、といったイメージを払拭すること。

◎資料作成で大事にしてほしいこと

本人の希望が生活の実際にどのように生きているのかや、その背景に多くの人の支援、制度があることが見える。生活の雰囲気がわかる写真、動画を活用する。

例) 余暇、外出、パソコン操作、入浴等

◎講義を進めるうえでのポイント

当事者のある一日を、朝から夜までのタイムスケジュールに沿って紹介できると良い。
特に、関わっている支援者らについて触れると良い。

3節 まとめ:地域で暮らす“私”から皆様へのメッセージ

◎ねらい

授業内で紹介したある1日は、あくまで一例であり、受講者たちの生活が個々人で異なるのと同じように、障がいをもつ当事者も生き方や暮らし方は異なることを伝える。

◎資料作成で大事にしてほしいこと

学校ではなかなか学ぶことができない当事者自身の想いや現実に触れられることが本講義の魅力の一つである。よって、これから地域を支える学生へ、当事者だからこそ伝えられる、伝えたいメッセージが表現されている。

◎講義を進めるうえでのポイント

この章では、当事者にとって介助者や福祉制度が切っても切り離せない存在であることを学生に伝えたい。日々を暮らすうえで、講義担当者が何を大切にしているのか、それを可能にするために介助者や福祉制度がどう絡んでいるのかについて解説してほしい。そして、当事者自身にとって介助者や福祉制度はどのような存在か、その想いを語ってほしい。

2章 地域で支える

テキスト作成者：本間里美

◎所要時間 60分～90分(途中休憩あり)

1節 “体調を整える” —地域で支える根底にある考え方—

◎ねらい

地域で暮らす当事者が持つ障がいの種類や背景は様々だが、障がいと共に生きるために大切なこととして、その疾患をもちながらも“体調を整える”がベースとしてあることを理解してもらう。「治す」「治る」とは異なる考え方があることが伝わる。

2節 “体調を整える” —支える人たちの実践ポイント—

◎ねらい

専門職は「この人はこの疾患だからこうだろう」「これはこの疾患の特徴だ」「自分が得意とするベースの知識に偏って考える」という決めつけた考え方に陥りやすい。

決めつけた考え方、既存の知識だけでは、当事者に本当に必要なアプローチが選択できず、専門的な知識を生かすためのスタートにすら立てないことを知ってもらう。

◎資料作成で大事にしてほしいこと

(1)(2)(3)で挙げるそれぞれのポイントについて、実体験を紹介しながら説明する。講師のこれまでの失敗談を紹介することで、実際に起き得ることなんだと感じてもらいやすい。

◎講義を進めるうえでのポイント

“体調を整える”を支える専門職が実践しているポイントを三つ紹介しているが、これらのポイントは職種を問わず当事者を支える人たちすべてに共通して実践してほしいポイントでもある。

3節 支える人たち

◎ねらい

様々な職種の地域での役割や大切にすべき姿勢を知ってもらうこと。

◎資料作成で大事にしてほしいこと

(1) 訪問診療医: 多職種からの情報を統括し、「生きる」と「暮らす」を支える司令塔である。一方で、当事者の望む生き方を目標に連携・協働するチームの構成要素の一人であることを伝えること。

(2) 看護師: 看護の役割の中に介助が包括されていることや、介助者との連携が重要であることを伝えること。

例えば ALS の場合、進行が初期の頃は、介助者との関わりより、訪問看護との関わりが先行する。訪問看護師単独で着替え、排泄、入浴など介助を行う場合もあれば、ベッドから車椅子への移乗に2人介助が必要な状況など介助者と連携し、着替えや移乗を行う場合もある。

(3) 訪問リハビリ: 地域で暮らす当事者には、PT・OT・STすべての職種が各々関わるのが難しい現実があること。そのため、訪問リハビリに携わる療法士は、自らの専門性だけでなく、他の職種の専門性の要素も踏まえて関わるのが大切であることを伝える。

(4) 介助者: 介助者はどの職種よりも当事者に深く関わる職種であり、「地域で暮らす」を支えるキーパーソンになっていること。短時間をベースにした関わりが主体の訪問介護と長時間をベースにした関わりが主体の重度訪問介護があることを教える。

(5) ケアマネージャー: 当事者の望む暮らしに必要なサービスを介護保険の知識をベースにプランニングする調整役であることを教える。

(6) 相談支援専門員: 当事者の望む暮らしに必要なサービスを総合支援法の知識をベースにプランニングするだけでなく、就労支援など幅広い助言をする相談役であることを教える。

◎講義を進めるうえでのポイント

講師から説明する前に、学生たちが各職種にどのようなイメージを抱いているか、記載してもらい、発表してもらう(⇒★資料「【考えよう】どんな役割・どんな仕事をすると思いますか?」を使用)。その後、講義で具体例を含め紹介していくことで、主体的に学べる状況を作るとよい。

4 節 支える人たちの背景にあるもの

◎ねらい

「地域で暮らす」を支える人の背景には、多くの制度が絡み合っていることがイメージできる。重度訪問介護が関わる時間は、どの制度よりも多いことがイメージできる。

◎資料作成で大事にしてほしいこと

在宅生活を支える医療・福祉サービスとして、医療保険制度、介護保険制度、障害者総合支援法、地方自治体独自の制度の4つがある。これらの制度が絡み合っていることを表した図や、当事者の1週間を支える支援者がどの制度をもとに派遣されているのか、制度ごとに色分けて表現するなど、視覚的にイメージしやすい工夫があると良い。⇒★本間作成のパワーポイントを参照のこと!

それぞれの証明書(健康保険証、特定医療者受給者証、心身障害者医療費受給者証)の対象や助成内容を分かりやすく伝える。

5 節 支える“アイテム”の実際

◎ねらい

医療的ケアが必要な重度身体障がい者がよく活用するアイテム(気管カニューレ・人工呼吸器・吸引器・排痰補助装置・胃ろう・バックバルブマスク)と、そのアイテムの活用方法がイメージできる。

◎資料作成で大事にしてほしいこと

(1) 人工呼吸器：人工呼吸器は、活用する当事者の“体調が整っているか”の指標の一つになる情報がある機器であることが伝わる。また、人工呼吸器が必要な方にとって、「導入さえすれば OK」という万能なものではなく、進行や状況によって適切に設定されなければ装着していても苦しいという状況になりうるものであることを伝える。

(2) 吸引器：吸引は、人工呼吸器を使用する当事者の方にとって必要不可欠なものであることを伝える。また、その方法は、その方の苦痛に配慮した方法でなくてはならず、吸引する側の利便性で吸引カテーテルの選択や方法を決定してはいけないことを伝える。

(3) 排痰補助装置：痰の排出、胸郭の可動性の維持を目的とされた機器であること、拘束性換気障害には積極的にとりいれることが推奨されているアイテムであることを伝える。またその活用や調整は、訪問リハビリが専門性をもって関われるものであること、生活の中で活用する場合は医師の支持の下、介助者も実施できるものであることを伝える。

(4) 気管カニューレ：気管カニューレを活用する当事者にとって、“外れること＝呼吸ができなくなること”に直結することを伝える。そのため、その構造の理解と、万が一の緊急事態の対処法を知っておくことの大切さが表現できている。例として、違法性阻却事由をあげ、カニューレの装着は医療行為であり、本来であれば医師以外の者が行うと処罰の対象となるが、万が一外れた場合、その場にいあわせた者が挿入しても罪に問われないことを知ってもらう。

(5) バックバルブマスク：気管切開下での人工呼吸器ユーザーにとっては、入浴、移乗など、人工呼吸器を外す必要がある時に日常的に活用するものであることが伝わる。また、緊急時（呼吸器の故障等）には命をつなぐアイテムの一つであるため、関わる人は誰でも方法を知っておくべきものであり、空気の入れ方やタイミングは個別性があるため実際の練習が必要であることを伝える。

(6) 胃ろう：胃ろうは、経口摂取ができなくなったから造設するものではないことを伝える。また、進行疾患の場合、発症初期に造設しておくことで必要な栄養素を無理なく摂取し、好きなものを少量でも口から摂取するなど活用の幅があることを伝える。

◎講義を進めるうえでのポイント

実際に活用する当事者の方と共に実演を通して学んでもらう(⇒★講義動画参照)

6 節 社会資源の一部としての病院の役割

◎ねらい

これまでの講義を通して、地域で暮らす当事者を支える職種について説明してきた。しかし、当事者を支える上で病院も大切な役割を担っている。病院が担っている役割を改めて理解してもらいたい。

◎資料作成で大事にしてほしいこと

地域で暮らすことができる当事者の“体調を整える”土台となるのは、各種疾患の専門的な知識、評価をすることができる専門医、専門病院での定期検査や精密検査が必要であること。また、最も重要なのが、病院と在宅の連携であり、緊急時に対応できる病院の確保、互いの情報共有が地域で生きて支える要となることが伝わる。

◎講義を進めるうえでのポイント

在宅で暮らす当事者が病院に通う実際の例を表現できるとよい。

8 節 地域で働く私から皆様へのメッセージ

◎ねらい

「地域で支える」を実践しているからこそ伝えられる想いを受講者に伝えてほしい。

◎講義を進める上でのポイント

実際のエピソードなどを踏まえながら実際のかかわりが見えるとよい。

3章 地域で暮らす

テキスト作成者：長田直也、小田瞳（3節（4）（5））

1節 「どこ」で暮らそう？ 病院施設 VS 実家 VS 一人暮らし

◎大事にしていること

私たちがなぜ病院施設・実家ではなく、地域で一人暮らしをしているのか、ただ聞いてもらうだけでなく、その思考過程を追体験してもらいたい。ただし、「病院施設・実家=悪」とみなさずに、一人暮らししたくてもできない当事者がいること、様々なことを考慮して一人暮らしを選択しない当事者がいることは伝える。

◎講義を進めるうえでのポイント

テキストに受講者が考える病院・施設、実家、一人暮らしに対するイメージを書いてもらい、どこに住みたいかをグループワークでアウトプットしてもらおう。このとき、どのような意見でも否定せずに受け止め、余裕があればそれぞれの講義中にその意見について触れる。病院・施設に関しては、その地域での現状や実体験を入れると良い（自由に使えるWi-Fiがない、爪切りをお願いしたら二日待たされた等）。

2節 どんな「制度」を使う？

◎大事にしていること

制度は煩雑で難しい名前も多いので、覚えてほしいというよりは、知ってほしいというスタンスを持つ。また、体験先で、実際に当事者がどのような制度で収入を得て、車椅子を購入・レンタルし、介助サービスを利用して生活しているのか、疑問を持てるようになってもらえるような構成をしている。

◎講義を進めるうえでのポイント

住宅改修や車椅子などは写真を多用して、視覚的にわかりやすくする。可能であれば車椅子の機能を紹介し、実習などで使う簡易的な車椅子との違いを考えてもらい、一人ひとりにあったものやサービスが重要であることを認識してもらおう。

受講者が将来なりうる職業との接点も盛り込むように心がける（訪問看護でしてもらうこと、PTによる車椅子のシーティング等）。

3節 私たちの「仕事」って？ & 4節 地域生活を支える核は「人」

◎大事にしていること

外出する際に受ける合理的配慮は決してわがままでもなければ、特別なものでもなく、必要不可欠で当たり前の権利であること、そして未だにいちいち駅員に声をかけるなど煩わしいものばかりなので、健常者と同じ労力で、同じ移動手段・宿泊場所を利用できることがゴールであることを知ってもらう。

バリアフリー化や福祉サービスはただ与えられるのを待っていたのではなく、運動をして勝ち取った経緯がある

こと、受講者も一人の人間としてその一端を担うことができることを感じてもらう。

◎講義を進めるうえでのポイント

外出したくてもできない当事者がいることは必ず伝える。制度の名前よりも流れを理解してもらうよう心がける。

「地域で暮らす」最後の部分のため、受講者が疲れている事が多いので、「最後大事な話をするからよく聞いて」のように注意を促す。

第2部

介助者・医療者の視点と コミュニケーション

- 地域で暮らす重度身体障がい者を支える介助者のスタンスをイメージできる
- 個別性を重点においた医療者、介助者それぞれの関わり方をイメージできる
- 当事者や多職種とのコミュニケーションにおいて、大切なことを知る

◎2部1～5章全体に共通して意識すべきポイント

・特に自分の専攻とは違う学生に授業をする際には、他職種の視点を知ることの意義・利点を講義の冒頭で伝える。他職への理解は連携の第一歩であり、自分の考えをブラッシュアップするヒントであり、また盗むべき長所でもある。

・これまで提示した例) 対象学生が自分の専門分野とは異なる場合に他の職種の視点を知ること、自分自身の視点や思考過程を改善できるということを伝えていた。どの職種であっても「対象者を見て、状況を判断して、介入して、反応を見て、より良い介入へつなげる。」という思考サイクルは共通のものであることを伝えた。PPTも参照のこと。

・10分に1回は学生に問いかける。問いかけの内容は、正答があるようなものではなくて、考えを述べてもらうようなものにする。また、伝えてくれた考えは否定せずに、ただ受け止める。詳しく話を聞きたいと思ったら、質問する。あらかじめ望ましい方向性を設けなくて学生と向き合うことが大事。そうでないと、意図しない発言があったときに自分が戸惑う。学生の学びを自分の想像の範囲内に押し留めてしまうリスクが有る。対象学生の学年や学部にはばつきがあるので、よっぽど簡単で答えが明らかでない限り、問題は出さないほうが良い。正答がある問いかけに間違っただけの場合のフォローが難しい。

1章 医療者として持つべきスタンス

テキスト作成者：千葉早耶香（1～5章まで）

◎所用時間目安：10分

- 1節 当事者の生活を最重要視する視点
- 2節 専門性の活用と生活の尊重
- 3節 当事者と介助者からの声を聴き、ブラッシュアップし続けること

◎大事にしていること

- ・医療者として持つべきスタンスの内容を、具体例をベースにして説明する。
- ・医療者としての自分の経験を自分の言葉で伝える。
- ・この章のまとめとして、地域で働く医療者のスタンスを「当事者を尊重すること、生活を基盤として考える」としているが具体的な表現は講師に任せる。

◎講義を進めるうえでのポイント

- ・3つのスタンスを説明する際具体例は講師自身の経験に変えても良いが、学生にとって想像が容易な内容が良い。(教科書やPPT資料参照のこと)
- ・講義中に行った声掛けの例としては「このように当事者や介助者が困っているときにどのような介入ができるでしょうか？」などである。各具体例に対して学生に問いかけながら進めていった。

2章 医療者のように見る・考えるための

「身体」に関する基礎知識

◎所用時間目安 30分

- 1節 神経の解剖生理
- 2節 筋肉の解剖生理
- 3節 身体についてのまとめ

3章 医療者のように見る・考えるための

「苦痛」に関する基礎知識

◎所用時間目安 20分

- 1節 呼吸苦
- 2節 疼痛
- 3節 苦痛のまとめ

◎大事にしていること

- ・特に疾患や症状に関する内容は、一般的な病態生理を理解するというよりも、見学体験に行く当事者のことを理解するための授業である、ということをお忘れなく。各機能が障がいされるとどんな状態、自覚症状につながるのか考えさせる。
- ・各セクションで定期的に、「みなさんが行く当事者はどんな疾患で、どのような身体状態ですか？ 生活の中でどのように工夫をしているのでしょうか？ 考えてみましょう。見学での質問を考えてみましょう。」等と投げかける。
- ・基礎的な解剖生理に関しては対象の学年によって適宜省いても良いが、疾患とのつながりに関しては必ず伝えること。(教科書該当箇所：P.57,58,61)
- ・「動かない身体を動かす、支える」「不動の痛み」は、本授業において特異的な内容であり、省かない。

◎講義を進めるうえでのポイント

- ・実習経験が少ない学生が多いため、身体状態の説明では画像や、現地に当事者の方がいる場合には、その方の協力を得て、実際に見て、触れてもらって理解を促すとよい。当事者の体に実際に触れることで、学生同士の練習では気づけなかった学びを述べている学生が多かったため、これはぜひ取り入れてもらいたい。当事者がいない場合、人数が多すぎて全員が体験できない場合でも、学生同士で力を入れずに体に触れ合うように促すなど、工夫する。
- ・呼吸器や吸引のことは前日の授業でも説明を受けているため、「昨日の体験を思い出してください」な

どと声をかける。講師自身の経験、これまでに接してきた当事者の話を取り入れてほしい。

4章 医療者のように見る・考えるための

「こころ」に関する基礎知識

◎所用時間目安 15分

- 1 節 難病、重度の障がいを取り巻く要素
- 2 節 一般的な疾患の受容過程
- 3 節 難病・障がいの受容過程
- 4 節 心理のまとめ

◎大事にしていること

- ・「難病、重度の障がいを取り巻く要素」については、必要最低限の内容を抽出しているため、講師の判断次第では付け足しても良い。対象の学生は当事者の生活を実際に見学する前の状態のため、具体的な生活のイメージをしてもらいつつ、生活に伴う苦痛を想像させるような内容にする。
- ・「受容過程」のテーマでは、医療者の価値観を押し付けないこと、をポイントとして伝える。
- ・ここでも学生には、見学に行く当事者の生活がどのように構築されてきたのかを想像すること、また本人への質問を考えてもらうことを促す。
- ・「ナラティブ・アプローチの事例」は、医療者として当事者のナラティブを引き出したことで当事者のエンパワーメントにつながったものを紹介する。医療者は、一般的に多忙なため介入が細切れになる傾向にある。その中でどのように、対等に当事者と向き合っているのかを事例で示す。

◎講義を進めるうえでのポイント

- ・「【Pick up】疾患と精神症状：ALS の情動制止困難」は学生にはかなり難易度の高い内容のため、ALS は身体症状に注目されがちだが、精神症状もあることを紹介する程度になっている。
- ・「【Pick up】苦痛はどこにあるのか？「治らないけど、生きる。」を選ぶ社会」は、「治らないにもかかわらず、それだけの苦痛が続くにもかかわらず、なぜ人工呼吸器をつけて生きることを選んだのだろう」と思った人もいないだろうか、と学生に問いかける。時間的制約のために学生がじっくり考えたり話し合う時間を取れないので、「すべての授業が終わった後にもう一度振り返って考えて見てほしい」などと伝える。
- ・「【Pick up】受容について」では、学生に「あなたは自分の人生を受容していますか？」と問いかけても良い。

5章 医療者のように見る・考えるための

アセスメントの視点

◎所用時間目安 15分

1 節 バイオサイコソーシャルモデル

2 節 事例で考える

◎大事にしていること

・ここでバイオサイコソーシャルモデルを取り上げているのは、よほど急性期的な状況でない限り、この3つの視点で偏りなく対象者を捉えることが重要だと考えているからである。事例は教科書に掲載のものでなくてもかまわないが、前日の授業を含めたすべての授業の内容を踏まえて考えられるような事例が良い。「眠れない」というような当事者の具体的な訴えに関する事例検討は別の講義で行うため、地域に暮らす身体的重度障害を持つ当事者の暮らしを支える専門職としての視点を考えられるような事例とする。

教科書の事例) BさんはALSの進行により、気管切開をして人工呼吸器を装着しなければ死んでしまう状況にあった。ある日、訪問に行ったあなたに、Bさんは「死にたい。呼吸器はつけない。」と言った。

・これまでの授業では5章のまとめは「全人的に捉える視点を忘れないこと」としていた。具体的な表現は講師によって変更しても良いが本質の部分は変わらないようにしてもらえると良い。

◎講義を進めるうえでのポイント

・「アセスメント」は学部によって捉え方に違いがあるので注意する。この文脈におけるアセスメントは、状況判断にとどまり、医療者としてどのような介入が必要なのかまでは求めていない。「今事例で何が起きているのか?」「みなさんなら何を聞くか?」「どのような想像をするのか?」を考えて、答えてもらう。

6章 介助の視点で覗いてみよう

テキスト作成者：江口健司

1節 介助とは何？ 介護とは違う？

◎大事にしていること

ヘルパーの仕事は、一般的に介護（利用者の生活を支援すること）という表現でイメージされることが多いが、この講義では介助（その人らしい生活を支援すること）という表現を使い、違いを意識させたい。しかし、介護と介助にはそれぞれに大切な役割があり、また、相関関係であるということを伝える。

◎講義を進めるうえでのポイント

1節・2節については、「介助（個別に対応した支援）をするためには、利用者の個別性の理解が必要である」という考えのもとに構成している。そのつながりが感じられるような話し方がよい。

2節 介助者のように考えるための「個別性の理解」

◎大事にしていること

介助とはどのような支援をするにしても、利用者の「こうしたい」という意思のもとに行われるものである。しかし、その意思のもとに行われたことが、利用者にとって最適な方法ではない場合もある。それだけでなく、その意思は介助者に気を使って伝えていた可能性や、意思疎通が困難であることが原因で、本心を伝えることができていない可能性もある。そのため、介助者は常に利用者のために何ができるかを考えて準備し、また、一緒に考えて一緒に行うことが大事であることを伝える。

◎講義を進めるうえでのポイント

①～⑤の各支援をするにあたってどのような工夫を日頃から行っているのかを、講師自身が経験した事例を入れながら伝えるとイメージしやすい。

3節 介助者のように考えてみる「利用者の思いに気付くためのポイント」

◎大事にしていること

利用者の思いに気付くために必要なポイントを伝えている。相手の気持ちになって考えるということは正解であるが、想像して気持ちを読み取るのは容易ではない。そこで、具体的な方法として、相手の目線で考える「連想」が必要となる。そのために「様子を窺うこと・状況を観察すること・考えること」という行為を意識することがポイントになる。ただし、その過程で思い込まずに確認することがとても大事であることもしっかり伝えたい。

◎講義を進めるうえでのポイント

講師自身が新人介助者や後輩介助者に指導している中で苦労した事例などを交えて話すと、理解しやすい。

4節 介助者のように考えてみる「五感を働かせて気付くためのヒント」

◎大事にしていること

どんなことがきっかけで、利用者の異常や違和感に気付くかわからないため、様々な状況や情報を意識して観察する必要があり、また、気付くためには普段の状況や状態を常に観察していることが前提にあることを伝える。利用者の視点や五感で気付くこともあるが、介助者の視点や五感を生かすことで気付けることもたくさんあり、また、様々な場所にヒントがあるということを伝える。

気付くことができるようになると、利用者との関係性が生まれる。それについては強調してほしい。

◎講義を進めるうえでのポイント

一つのヒントから考えられることは一つとは限らないということを伝えるため、事例の答えを発表する前に学生の考えを聞いてみるという進め方も良い。

5節 介助者のように考えてみる「気付くことが容易ではない心のこと」

◎大事にしていること

利用者の異常や違和感に気付くためのヒントを述べたが、このようなヒントを用いても利用者の「心」を理解するのは容易ではない。利用者の「心」に波があるということを知ってもらいたい。介助している自分やその方法を利用者に受け入れてもらえない瞬間があるとしたら、一つの可能性として「心」の波を考えてみてほしい。波のように揺れ動いているわけなので、その瞬間の利用者の意思がすべてであると考えなくてもよいのである。1対1で関わることが多い利用者や介助者だが、ほかの介助者や多職種が関わっており、チームだと考えることもできる。何か課題や問題を抱えたとき、一人で解決しようとせずチームで解決しようとアプローチすることは、利用者に関わる自分自身の心を守ることもつながるということ伝える。

◎講義を進めるうえでのポイント

〈事例の参考〉

(1)身体整容を行う際に、いつもと同じ方法で行っていても上手くいかないケースや、他の介助者が行うと上手くいったケースなど。

(2)進行性の疾患により行動に制限がかかり、受容するのに時間がかかったケース。トイレ介助や入浴介助など。

(3)感情のコントロールができなかったり、言動が日によって変わったりしたケースなど。

6節 介助者のように考えてみる「利用者の思い」

◎大事にしていること

気管切開し人工呼吸器を装着することにより、当事者は声が出せなくなる。米沢さんは声を失うことに葛藤し、音声を残すことに希望を見出すことができた。そんな米沢さんの思いがこもった音声資料は大変貴重である。これを紹介することで、障がいにより声を失う現実や、音声を通じて温かみを感じてもらえるのではないかといいねらい

がある。

そして介助者に求めることは、介護技術やコミュニケーション技術の習得よりも、まずは心が通じることであるという米沢さんの言葉は、どの学生にとっても学びの深いものであり、講師にはここを強調してほしい。

米沢さんは講師が直接あったことのない当事者にはなるが、上記の理由からこの6節は差し替えなどせず使用してほしい。

◎講義を進めるうえでのポイント

初めに、意思伝達装置に入力した文字が、事前に収録した米沢さんの声を組み合わせて読み上げられていることを説明すると、理解しやすい。

コメントに対して、講師自身の感想を交えながら進められると良い。

【Pick up】 介助の視点の考え方を練習しよう

◎目的

2日間の授業を通して学んだことを生かして、自分たちの専門分野以外の視点でも対象者のことを考えることができる

◎目標

1. 当事者の多様性を知る
2. 介助者及び医療者の多様な視点で、当事者自身やその生活を考えることができる
3. 当事者を支援する上で本人の想いを知ることが大事だと気づくことができる
4. 多職種視点で事例を考察することで、多職種連携に向けた示唆を得られる

◎時間割

〈GW 前講義〉 20分

〈GW〉 25分

〈発表〉 15分

〈GW 前講義〉

テキストとパワーポイントを活用し個人で考える練習をする。PPT 参照

〈GW〉

「考えよう」シートをベースにグループで考えをまとめていく。

(⇒★資料「【考えよう】 介助の視点の考え方を練習しよう」参照)

◎今得られている情報に入っていると良い指標(ワークシート例を参照)

- ・ 基本情報 (年齢、疾患、ADL、介助量、介助体制)
- ・ 医療情報 (人工呼吸器使用状況など)
- ・ 事例を考える上で必要最低限の情報を記載する

◎ファシリテーション

GWでは、正解があるものではないため、2日間の講義を通して学んだことを参照しつつ、多様な視点で意見を出せることが重要だということを冒頭で伝える。不明点がある場合はネット検索可、講師陣への質問も可。質問の内容は適宜全体へ共有する。

「背景要素を知るために足りない情報は何か？」

- ・当事者視点でも考えようとしているか？
- ・生活のリズムを知ろうとしているか？

「主訴の背景を探るために足りない情報をどのようにして集めるか？」

- ・当事者に話を聞く姿勢はあるか？
- ・多職種から情報をとろうとしているか？

〈発表〉

各グループ2~3分程度で発表する。

◎発表後の介助者、医療職者からのフィードバック

学生の答えをなぞりながら、介助者や医療職種からフィードバックをする。事例を見て自分だったらここを確認するというような内容とする。その場にいる多職種全員が発言するように促すと良い。

◎当事者からのフィードバック

- ・いろいろ言ってくれたけど、実は自分の気持ちとしてはこうだったという内容
- ・介助者と医療者から言われることと自分の意思とかけ離れたこともある。

7章 コミュニケーション支援について

テキスト作成者：吉澤卓馬

監修：山本直史

◎受講者に最初に知ってほしいこと・この講義のポイント

この講義は、見学体験に行く前に行う授業です。なので、見学体験に行った先で、どのような方法でコミュニケーションをとっているのか、患者さん・利用者さん・介助者の人はコミュニケーションをとる際にどんなことを考えているかなどを、見たり聞いたりする際の材料として、この授業が活かせることを、受講者に最初に伝えてほしいです。

1節 コミュニケーション手段に障害がある人たちのコミュニケーションについて

◎大事にしていること

コミュニケーションには「自分の意思を書字や声を使って相手に伝える」という一連の流れがあることを知ってほしい。自分の意思が相手に伝わって初めてコミュニケーションが成立するため、コミュニケーションは絶対に1人で成立しないことを強調したいです。例えば、伝達する手段である「声」が失われただけであって、本人の意思がなくなるわけではありません。伝達する手段さえ用意できれば本人の意思を伝えることができます。意思を伝える「手段」が失われたことで、本人の意思もなくなってしまうとみなされるのは、大きな誤解です。その手段を提供できるのは我々専門職の強みであると思っています。

◎講義を進めるうえでのポイント

コミュニケーション手段に障がいを抱える患者さん・利用者さんとの関わりの中で、本人の意思が疎かにされてしまう場面や状況を具体的に説明すると、コミュニケーション支援の重要性に気づいてもらいやすいです。

2節 ALS 患者のコミュニケーション方法

◎大事にしていること

ALS になり声を失ってしまうメカニズムを簡単に説明するが、スピーチカニューレを使用し、声が出せる人もいることを知っておいてほしいです。

拡大・代替コミュニケーションの導入前に、必ず「Yes」「No」の合図を決めることが重要なことを強調して欲しいです。

透明文字盤、口文字、意思伝達装置の3つの使用方法などを説明。その他にも、講師が過去に経験したコミュニケーション支援方法があれば、随時追加してもらってかまいません。透明文字盤と口文字については、講義後に体験してもらう時間を設けています（体験についてのポイントは後述）。そのため、使用方法の説明図は学生がひとりで見ても分かるように、絵や図を使って分かりやすく作成する。

口文字の先読みに関しては、慣れていない状況で使ってしまうと読み取り効率の低下や信頼関係構築の阻害因子となってしまいます。しかし、患者さん・利用者さんとの同意やルールを決めることにより、読み取りの効率が向上したり、患者さん・利用者さんの伝えたいことを素早く伝える効率の良い手段になります。

先読みするにしても、あくまで本人との同意やルールのもとに行う必要があることを強調して伝えて欲しいです。

◎講義を進めるうえでのポイント

主には ALS 患者に対するコミュニケーションの方法を説明する節であるが、講師自身が実際にコミュニケーション現場で経験したできごとや、自分の感情や思いなどがあれば、随時伝えていくと良い。実際の経験談を聞けるのが、このカリプロのいいところ！

3節 コミュニケーション支援で重要なこと

◎大事にしていること

コミュニケーション支援は、支援者が最適だと思った支援方法押し付けるのではなく、患者さん・利用者さんと共に作り上げていくものであると考えています。その過程で、新しい方法でうまくコミュニケーションが取れない場面が続くと、どうしても患者さん・利用者さんが新しい方法でコミュニケーションを取ることをあきらめそうになってしまいます。そんな時は、「○○という方法で、あなたの意見や意思を私が理解したいんです」という、お願いも含めたスタンスで支援していくことで、患者さん・利用者さん自身がコミュニケーションを諦めることなく支援が継続できることがあります。「あなたのことを知りたいんです、お願いします」という人の存在によって、意見や意思を発するハードルが下がるからかもしれません。そして、冒頭にも説明した「コミュニケーションは絶対に 1 人では成立しない」というのは、こういったことから言えると思います。そのような経験から、この「お願いも含めたスタンス」を大事にしていることを強調してほしいです。

この講義を聞いた人が、コミュニケーションに困っている人を発見できる人になり、患者に関わる他の職種へ情報を提供・共有し、協力しながら支援できることが理想であることを強調してほしいです。

◎講義を進めるうえでのポイント

コミュニケーション支援でテキスト作成者が重要としていることをわかりやすく伝えてほしいです。テキストに記載されていること以外に、講師自身が重要としていることがあれば、発表資料に追加して伝えてもらってもかまいません。その際は、実体験などを交えて話すと受講者が想像しやすいです。

4節 医療現場におけるコミュニケーション支援の事例紹介

◎大事にしていること

実際にコミュニケーション支援を行った事例の紹介について。講師自身が医療現場だけでなく、在宅やボランティア、学生時代の経験など、コミュニケーション手段に障がいのある人と関わった経験談があれば、紹介してください。その事例でコミュニケーションについて学んだことや気づきがわかりやすく記載されていると良いです。テキストは差し替えができないため、追加資料という形で作成することとなります。お手数をおかけしますがよろしくお願いします（用意が難しい場合は、現状のテキストをそのまま読んでいただいてもかまいません）。

◎講義を進めるうえでのポイント

とにかく経験して学んだこと、感じたことを伝えていく。実際の事例紹介や経験談はインパクトがあると岡部さんからのお言葉をいただきました。

コラム 学生ヘルパーを経験して感じたコミュニケーションの重要性

◎大事にしていること

学生ヘルパー時代に経験したコミュニケーションに関する体験談を記載。苦い思い出や苦労話もあれば聞きたいです。リアルに!感じたままに!

学生ヘルパーの経験がない方であれば、コミュニケーションに関する思いや考え、経験談などを発表資料として作成して欲しいです。テキストは差し替えが難しいため、追加資料という形で A4 用紙1枚や、パワポの発表資料に載せるだけでも構いません。

コミュニケーション体験を進める上でのポイント

※基本的には経験者が補助に入るので、動きや流れを確認・把握してほしいです。

- ①休憩中に事前に各テーブルに透明文字盤(50音表とフリック式の2枚)を配っておく。
- ②2人組を作ってもらおう。席順でパッと決めるのがオススメ。学生に決めさせると時間かかる!!
- ③読み手と患者役を決めてもらう。
- ④YES・NOの合図を決めてもらう。(YESはまばたき、NOは眼球を右に動かすなど具体例を出すと決めてもらいやすい)他の合図(例:YESは頷き、手を握る、NOは目を閉じ続けるなど)も紹介し、色んな合図があることを知ってもらいたいことも強調する。
- ⑤まずは50音表から実施。
- ⑥2文字の単語(例:いぬ)を取ってもらおう。→目線を合わせる練習が目的!目と目が合って、その間の文字をとる感覚を掴んでもらうため。
- ⑦できたら3文字、4文字と増やして例を挙げる。その時の講義時間に合わせて時間調整が必要なので、2文字でやめてもOK!ここで調整できる!
- ⑧慣れてきたら役割を交代
- ⑨お互い取れるようになってきたら次は文章へ!
- ⑩読み手が質問し、患者役が文字盤で答える。「今日の朝ご飯は?」「出身地は?」
- ⑪できたら交代
- ⑫次に患者役が文字盤を通して読み手に質問を投げかける。文字盤で質問文を伝える難しさを知ってほしい。
→ここ重要!
- ⑬口文字はコロナの影響で実施出来ませんでした。。。。

第3部

「障がい」について考えよう

- 社会モデルに基づいた「障がい」を理解するための重要概念について学ぶ
- 実習を通して得た気づきについて、周りとの意見を交換しながら考えを深める
- 「障がい」について新しい見方を獲得し、「障がい」をなくすために今後自分がどうありたいかを言葉にしてみる

1章 障がいって何？当たり前の見方を変えてみよう

テキスト作成者：長田直也

1節 障害者権利条約

◎大事にしていること

「障がいとはなにか？」を考える手がかりを与えるための講義であるため、障害者権利条約について述べたいことはたくさんあるが、「個人モデルから社会モデル」「差別について」の2点を中心に講義を展開していく。

◎講義を進めるうえでのポイント

「体験のときに見た、聞いた差別はありますか？」と聞いて、体験と関連付ける。

その地域であった差別事例があるとよい(最寄りの中野駅にエレベーターが無い、講義帰りのバスで事前連絡を求められた等)。

2節 環境調整 & 3節 障がい者と健常者の境

◎大事にしていること

合理的配慮の例で、学生がバイト先でできそうなこと、将来できそうなことを例にあげ、身近なものと感じてもらう。必要な支援がなければ、誰しもが社会的に排除されうることを理解してもらい、障がいの概念をもう一度考え直す一助にしてもらう。

◎講義を進めるうえでのポイント

合理的配慮はすべての人が受けられるものであるため、障がい者だけが受けられるものと勘違いされないように注意する。

受講者も障がい者になりうることを気づかせたい場合、生き辛い体験や取り残された体験を聞くと、「怪我をして学校に行けなかった」などの身体的な例しか出てこない場合があるため、取り残されそうだったけど〇〇のおかげで助かった体験を聞いたほうが、「旅行中翻訳機があって助かった」「学校の班分けで余りそうだったけど声をかけてくれる人がいた」など幅広い例が出る。

『学生時代の介助経験を振り返る』

テキスト作成者：川村 由里

◎所用時間目安 15～30分

◎講義の内容

- ①学生ヘルパー時代の介助経験を紹介する。
- ②介助の経験が今の生活・仕事にどのように活かしているか、自分なりに思ったことを伝える。

◎強調してほしいこと

介助者の視点と、介助者無しでは、当事者は生活することが難しいという点を重点的に話す。
学生ヘルパーを募集していること。

◎講義内容の考え方

①について

自分が学生ヘルパーを経験して思ったことを分かりやすく伝えることが大事である。

第6章では介助の内容について「医療的ケア」「身体介助」「家事援助」「コミュニケーション」「その人が望む生き方のサポート」という項目に分けている。自分の介助経験をこの項目に分けたうえで、印象深い経験について振り返っていくとより具体的に説明できる。

②について

自分なりに思ったことを分かりやすく伝える。

学生たちの人生にも活かせることがあると感じてもらえるとよい。

【考えよう】 障がってなんだろう？

◆Before (1日目)

あなたが考える【障がい】とはなんですか？

◆After (5日目)

当事者はどんな生活をしていましたか？介助者はどのような関わりをしていましたか？

当事者との関わりの中で、【障がい】はありましたか？それはどんなことですか？

日常生活のなかで、あなたは【障がい】を感じることはありますか？それはどんなときですか？

あなたが考える【障がい】とはなんですか？

GW「地域で暮らす」を考えよう！指導者マニュアル

本講義は、学生がグループになって地域で暮らす当事者に、対面もしくはオンラインで質問を
してもらおう双方向的コミュニケーションの実施を目的とする。

1日目の午後の一番最初のコマに実施する。

1. 目標

- ・地域で暮らす当事者の生き方の多様性に触れることができる
- ・見学体験時に当事者に対して質問をする際の練習として、内容を検討することができる
- ・グループメンバーとのディスカッションを通して交流を深める事ができる
- ・午前中の講義（「地域で生きる」「地域で支える」）を通して得た学びを生かして、地域での暮らしを想像し、当事者への質問を投げかける中でより具体的な暮らしをイメージすることができる

2. 進め方とポイント

1) 導入（5分）

- ・事前にフェイスシートを配布する
- ・地域で暮らす当事者が挨拶と自己紹介をする（生の会話を意識してもらえると良い）
- ・自己紹介の内容は、フェイスシートの記載項目によらず自由な内容とする
その日の午前中の過ごし方、過ごし方の中で介助者や医療者との関わりがあれば、それについて紹介してもらう。
例）「息子が幼稚園に行っていて、3時に帰ってくるので講義が終わるころは賑やかかも！」

2) GWによる質問内容の検討と実施（20分～25分）

- ・フェイスシートや自己紹介の内容を踏まえて、質問したいことをリストアップする
 - ・質問を思いついたグループから当事者に直接質問してもらい、答えてもらう
 - ・当事者との直接の会話、やりとりを重視しているため、記録やメモに集中せず話を聞くように促す
 - ・この講義の内容を踏まえて、見学体験で何う当事者への質問を検討するように伝える
 - ・当事者への質問は後日メールで送り、対応していただくことも可能なため、講義中の時間がなくなるようであれば全グループにあてる必要性はない
- 質問例）「病気で悩んだりしたことはあったか？」「これからやりたいことはあるか？」など

3) まとめ

- ・最後に当事者から学生に対してメッセージを伝えてもらう

【考えよう】どんな役割・どんな仕事をしたいと思いますか？

☆は難易度

☆【訪問医】

☆【訪問看護師】

☆【訪問理学療法士】

☆☆【訪問作業療法士】

☆☆【訪問言語聴覚士】

☆【訪問介護士】

☆☆☆【ケアマネージャー】

☆☆☆☆【相談支援専門員】

【考えよう】 介助の視点の考え方を練習しよう

—考えよう①—

●当事者情報
氏名： 性別：男性 年齢：28歳 疾患：脊髄性筋萎縮症Ⅱ型 医療情報：夜間 NPPV 装着/カフアシスト使用 基本動作：全介助（関わっている介助者 17名） 移動動作：常時電動車いす ADL：食事はセッティング環境により自立/PCはキーボードにて可能/携帯操作可能 ※スマホでの検索可

●主訴
最近夜眠れず、朝起きるのが辛い・・・

●今得られている情報から考えられる原因は何か？

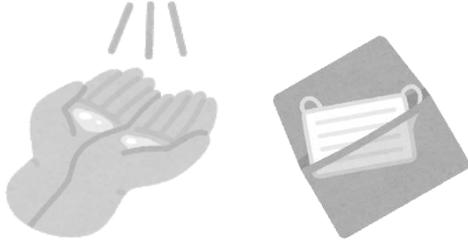
●主訴の背景を探るために足りない情報は何か？

●主訴の背景を探るために足りない情報をどのようにして集めるか？

—考えよう②—

●介助者の視点	●本人の言葉	●医療者の視点

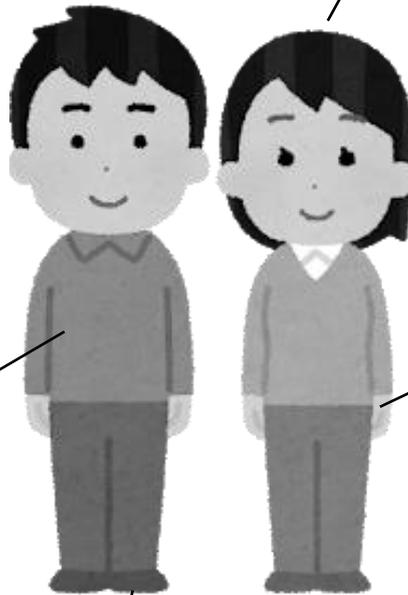
【やってみよう】 マナーチェック



- 日頃より感染防止に努め、介助中は常にマスクを着用すること
- 介助時のマスクは出勤時とは変えて新しくすること

- 身体介助では身体を密着させるので、清潔で、引っかかるものがない服を選ぶ
- 裾や袖がだぶついた服は、車いすなどに引っかかり、思わぬ事故を起こすので控える
- ベルトのバックルなども怪我の一因になるのでシンプルなものを選ぶ
- 屈んだ時に下着や肌が露出しないものを着る
- スカートは止める
- たくさん汗をかく人は着替えを持参する
- バッグは両手が空くりュックやショルダーバッグで、自分で持ち歩けるサイズ・重量のもの

- 抱える際、髪が利用者にかからないようヘアゴムなどでまとめる



- 爪は短く整える
- 指輪、腕時計は利用者の身体を傷つける可能性がありますので、介助中は外す
- 長いネックレスや大きなピアスも、介助に支障をきたす場合がありますので控える
- 香水や香り付きのクリームは、頭が痛くなったり気持ち悪くなったりするので控える

- 感染予防も含め、靴下を着用する（スリッパなど何か室内履きが欲しい人は持参のこと）
- 靴は介助に適したもの（濡れたら嫌な革靴とか、ヒールが高くて走れない、脱げやすいサンダル、着脱に時間がかかる編上げ靴などはダメ）

【やってみよう】

◆当事者・介助者に質問してみよう

質問	答え	どう思った？

◆MISSION

MISSION（当事者より）	実際どんなことをした？どう思った？	MEMO

【考えよう】 重度障がい者の介助に入るってどういうこと？

以下は、ある当事者の方が介助者の方々へ伝えていることです

□車いすを使えば歩けないという障がいがなくなり、呼吸器を使えば呼吸ができないという障がいなくなるように、介助者が私の思うように動いてくれるほど、私の障がいはなくなっていきます。私が「重度障がい者」であるかどうかは、あなたの姿勢や介助技術にもかかっています。

□私も人間なので、毎日気分も違うし、元気な時も、疲れている時もあります。その時々気分・体調の状況に合わせて介助して下さい。

□とはいえ、お互いに人間同士なので、理解しにくい部分や、指示が分からない部分もたくさんあります。まずは、私をよく観察し、それでもよく分からない時は、ちゃんと私に聞いてください。「分かったつもり」にならないでください。

□あなたは私ではないので、私の大変さは分かりません。そして私は介助をしたことが無いので、介助の大変さは分かりません。私も、何がどう大変なのか伝える努力をしますので、あなたも、自分の身を守るために必要な、やりにくい部分・改善できそうな提案などがあったら、私に伝えて下さい。

□「指示があってから動く」が基本ですが、「必ず毎回同じパターン」での介助（洗濯物を畳んでしまう、車いす移乗の後姿勢を整える、キッチンの洗い物を片づけるなど）は、言われなくてもやって下さい（ただし、「××しておきますね（おきました）」という確認は必ずしてください）。

□「指示があってから動く」が基本ですが、待機の間何も考えずにボーっとしているのではなく、いつごろ、どんな指示が出るだろうな、という想定をしながら待機してください（「待機中」も時給が発生している仕事です）。



気持ちとしては、

ではなく



という感じが「待機」です。

□介助の時間は、あなたにとっては、1週間のうちの何時間かもしれませんが、たくさんいる介助者たちの何時間かが連鎖して、私の生活は成立しており、そのたった1コマが抜けても、生活に支障をきたします。あなたの1週間のうちの何時間かが、ひとりの人間の生活と命を支える「エッセンシャルワーク」であることを自覚し、誇りをもっていてください。

同じ病気を抱えていても症状や状態は個別です。進行性のものもあるし、年も取っていきます。自治体によってゴミの捨て方は異なるし、家によってルールは異なります。その方によって介助者に求めるものも異なるのかもしれませんが、介助に入るってどういうこと？考えてみましょう

実習記録

年 月 日 : ~ :

時系列	見学・経験したこと	見学・経験したことを受けての考察
例) 11:00~ 12:00	文字盤でメニューを聞き、昼食を用意した。 胃瘻からスープを入れた	文字盤をしているときはずっと目を合わせているが、こんなに長時間人と目を合わせることはないなと思った。不思議と A さんの気持ちが伝わってくるような気がした。胃ろうから栄養を入れても満腹感はないとのことで、食べられない人でも味わえるような工夫があったら良いなと思った。

実習記録

年 月 日 : ~ :

時系列	見学・経験したこと	見学・経験したことを受けての考察

巡回担当者マニュアル

1. 巡回の目的

- 1) 学生や当事者の方の不都合等を伺い対応する
- 2) 体験の様子を記録し、SNS 公開の承諾を得る
- 3) 本カリキュラムの見学・体験の意義を再確認する。

2. 巡回の下準備

巡回担当当事者に自己紹介、巡回予定時間、緊急連絡先(電話番号)をお伝えする。※事務局と連携して実施

2. 巡回者の役割 (巡回時間は 20～30 分程度とお伝えしています)

- 1) 学生や当事者の方が困っていないかを伺う
- 2) 体験の様子をの一部を写真に撮る。 ※境を越えて【公式】Instagram への UP の許可を取る
- 3) 写真のキャプションを考える
- 4) 体験した感想、体験受け入れた感想をインタビューし記録
- 5) 記録提出方法(締め切り巡回日を含めての 1 週間後まで)
 - (1) SNSUp 用グループラインのメンバーとなる(難しい場合は、個別のメールやりとりにて実施)
 - (2) 以下の順番で UP する(リアルタイムでなくても良いです)
 - ① 当事者の方のお名前
 - ② 学生1・2の感想、当事者の方のコメント(例参照)
 - ③ 写真・キャプション
 - ⑤ 巡回しての感想(簡単に)

※双方の感想が薄い時の質問案

- 1) 講義で聞いていたことと比べ、実際はどうだったか?を質問する。とかを質問する
- 2) 当事者の方が用意したミッションの内、何をさせていただいたかを聞く何をしたら聞く
- 3) 学生が当事者の方に質問した内容とその回答を聞く

【SNSUP 用グループラインへの提出例】

■小田政利さん

小田さん「2 人とも飲みこみが早くてセンスがあります」

介助者さん「もう 10 年目かなってくらいたくましいな」

学生さん①「私たちとなんら変わらず普通に生活しているなと思った。

病院の患者さんより表情が良い気がする」

学生さん②「昨日初めて車椅子を押した。

車椅子を押すの力があるし、普段全然気にしてなかったけど道って結構ガタガタしてるんだなってことに気がついた。

小田さんの車椅子での段差昇降はコツがあるので介助者さん指導の下、自宅の段差を使って、車椅子での段差昇降の練習中！

その後、実際に外に出ました。

昨日の経験をもとに、1 人が先にエレベーターに入って待っているというのもバッチリできていました！



学生と会話する小田さん/車いすを押す学生と見守る介助者

5日目GW～クローズまでの進め方

※2022年9月に実施した回を参考にしています

5日目		
10:00～11:00	講師①	<p>講師①と②の紹介</p> <p>【GW1回目】</p> <p><u>実習経験談の共有</u></p> <p>【目標】：自分が見学・体験してきたことを言葉にできる</p> <p>【ファシリ的心得】</p> <p>※発表者を決める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・“自分達の体験を自分の言葉で話すことができる”を大テーマとする。 ・話しやすい雰囲気づくり ・自分の経験談を交えて学生らの言葉を引き出す。 ・質問内容と mission 課題を振り返りながら答えてもらう ・1日のスケジュールを互いに比較してもらう ・経験で感じた違和感も話せるとよい <p>※体験1日の場合は映画と絡めながら想起を上手くアシスト</p>
11:10～11:40	講師①	<p>グループ発表・3分程度・4チーム</p> <p><u>学生時代の介助体験を振り返る</u></p> <p>※講師①へ：介助バイトをしてみたい人は「境を越えてに連絡してほしい」と伝える</p> <p>Mail : info@sakaiwokoete.jp</p>
11:50～12:20		改めて考える「障がいとは？」記録/ After
12:20～13:20	昼休み	
13:20～14:20	3部講師 講師②	<p>【GW2回目】</p> <p><u>障がいて何？ 当たり前の見方を変えてみよう講義 20分</u></p> <p>【目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> ①自分自身を振り返り、その時どうあってほしかったか？ を考えられる ②障がいが自分とはまったくかけ離れた世界のものではないことに気づく <p>【ファシリ的心得】</p> <p>※「言いたくないことは言わなくても良い」とアナウンス。安心な場づくりを。</p> <p>※どんな答えであっても否定せず受けとめる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身体的な障害経験を答える人が多い(骨折など)ので、「障害」(インペアメント)ではなく、概念の「障害」(ディスアビリティ)として考えられるように促す。たとえば、社会からの抑圧も「障害」と言える。「周囲からの同調圧力で自分のやりたいことができていない」などであれば答えやすいので、ヒントを出す。 <p>EX) 疎外された経験/海外/男女差/理学療法士になるのを反対うけた /みため/セルフネグレクト</p> <p>【声かけのヒント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第3部1章のテキストを振り返りながら促してみる ・全員が発言できない可能性があるため、1人でも自分ごととして捉えて発言してもらえるとよい

		<ul style="list-style-type: none"> ・自分のことでどうしてもエピソードがなければ、友だちについても良い ・「辛かった」という感想だけになりやすい(考察としてもっと踏み込む) <p>⇒その時どうあってほしかった?と聞く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ差別などはわりと考えやすい模様。
14:30~15:00	<p>講師② 各:ファシリテーター</p>	<p style="text-align: center;">【GW3 回目】 ※発表者・記録者</p> <p style="text-align: center;">グループワークで「障がいとは?」について考える</p> <p>【目標】障がいについて新しい考え方が生まれ、自分はどうありたいか?を言葉にできる</p> <p>【ファシリの心得】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・“障害について今まで自分の中に無かった考えがでてくる” ・個人モデル→社会モデル ・“差別を無くすために、インクルーシブな社会を作るために自分ができることは何か?” ・どんな医療職になりたいかの発言がある ・“障害問題は他人ごとではなく自分自身の問題だと気付く” ・GW1・2を踏まえて考える ・「障がい者/健常者」に分けて話してしまいがちだが、「障がい者だから」と言わないようになるのがゴール ・障がいはそもそもない、周囲の姿勢や理解がないことで障害が生まれると解釈できるとよい ・ファシリ自身が、学生ヘルパー時代の経験などを話すとよい EX) 駅員対応、 <p>【声かけのポイント】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「明日からできることって何かあるかな?」 ・「介助アルバイトやってみたいと思った?」 ー単純に介助バイトをやるかやらないか?ではなく、なぜこのバイトが必なのか?自分の今後に活かせるのか?など伝えたい ・エレベーターの間に健康なのに待っている人どう? ・「中野駅にエレベーターないのどう思う?」 ・「ベビーカーで満員電車に乗ってるときに、嫌そうな人とかいるよね」
15:10~16:00	講師②	<p style="text-align: center;">グループ代表者による「障がいとは?」の発表会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ毎に障害のイメージの変化、その理由などが出せるように ・適宜、講師陣らに感想など求める。 ・臨機応変に…… ・体験受け入れの方にも感想などを促す
16:00~16:10	講師①	<p style="text-align: center;">終わりの挨拶</p> <ol style="list-style-type: none"> ①目標・目的の振り返り(テキスト参照) ②岡部から皆様へのメッセージ ③アンケートのお願い【QRコード】 ④#カリプロで感想のお願い Twitter とか ⑤ラインのお知らせ ⑤写真撮影

■岡部からみなさまへのメッセージ

初日に私が話したことを覚えていますか？忘れていませんか？では少し触れさせていただきます。お城の改修工事にあたって熊本城はエレベーターを付けて車いすでも上まで上がれるようにしました。一方で名古屋城は昔になるべく近いままが良いということでエレベーターの設置は障害者団体の要望を取り入れてもらえず、設置はしないことになっています。皆が酸はこの 5 日間の授業を通してどちらが良いと思いますか？

それは人それぞれの意見があって良いと思います。

この授業を受けたからと言ってエレベーターをつける派になってくださいと言っているわけではありません。私からの一つ目のお願いは、この授業を受けた皆さんにこういうことに興味をもってほしいなということです。

お城の改修工事なんで今までまり興味はなかったと思います。ましてそれにエレベーターがつくつかないなんて、まったく意識していなかったと思います。でも、こういうことに興味をもってくださいね。

もう一つはエレベーターをつけるかどうかの二社択一かどうかということを考えてほしいのです。二者択一は時として分裂や対立をうみます。障害者と健常者の間にも生まれるかもしれないのです。

ではお城の話でいうと例えば障害者はエレベーターをつける派で健常者はエレベーターをつけない派ということになりかねないのです。では

他の道も探してみましよう。エレベーターを設置するには何億円もかかります。ではその分で人を雇って人力で車いすを上げるというのはどうでしょうか。車いすが運べるスペースは必要ですが、それでもいつかは人件費が払えない日がきますので、入場料の中から人件費を組み立てておくかをするのです。これは対立は少なくなるかもしれません。多様性を認めるとか共生とはこんなところからも考えることができます。

もう一つ私が初日に話したことの中に京都でおこったALS患者の囑託殺人事件のことです。私は夢や目標を沢山もっているといた一方で、私と極めて似ている環境の ALS 患者が SNS でしりあった医者にお金を払って、殺してもらいました。世間では死んだ方がましとか死なせてやったほうが良いという意見も沢山ありました。私は本当に死なせた方が良いのか？と皆さんに問いかけてみました。それについての私の考えや想いを書いた原稿を配りますので後でゆっくり読んでください。

■アナウンス「メッセージに関連した資料がテキスト巻末にあるので、読んでみてください」

毎日新聞医療プレミア掲載文章

■クローズ

- 1 荷物は段ボールにまとめて、指定箇所に郵送する。
- 2 受け入れ先の先生に、ワークシートの印刷をお願いする(スキャンも可能かを聞いてみる)。
- 3 学生からフェイスシートを回収して、シュレッターにかける。

MEMO

地域生活の視点で学ぶ重度身体障がい者の暮らし
——「地域で暮らす」を覗いてみよう——

発行日：2023年3月31日

発行：NPO法人 境を越えて

団体HP：<https://sakaiwokoete.jp/>

公式Twitter：[@sakaiwokoete](https://twitter.com/sakaiwokoete)

連絡先：info@sakaiwokoete.jp

各種SNSは↓コチラからチェック！

